初

川柳句集　正本水客とその仲間

和

川柳句集　正本水客とその仲間

正本水客氏近影

麻生路郎先生と三人（向って左から水客・紫香・潮花）

絵と字　松川　杜的

もくじ

序文　橘高薫風……2
序文　八木千代……4
水客と私　黒川紫香……6
お礼に代えて　正本水客……8
水客を語る……11
麻生路郎・麻生葭乃・黒川紫香・丸尾(若柳)潮花・松川杜的
水客の句……19
ゴムバンド　真白い障子　葉書ひとつ
梅匂う　そばの花　名代七味屋
てんと虫　旅百景
仲間の句……185
あとがき

序文

麻生路郎先生の門下には剛柔、動静の別はあっても個性的な人物が蝟集していた。正本水客さんもそのお一人である。

葭乃先生は矢がつっ立っているようだと仰しゃったし、鶴のたたずまいに喩えた人もいる。すべてにめりはりがきき、屹立していた。

すべてというのは、その容姿や言動、句柄においてのことで、句会の披講や呼名一つのトーンにも会場の空気を引き締めるものがあった。と言っても心して孤高に徹した冷たさはなく、当時の私たち初心者にも温かく、巧まぬ洒落も聞かされた。

それは山登りからはじめられて、今に至る趣味の旅のよってしからしめるものと私は思ってる。

路郎先生も水客さんの旅の句を特にすぐれたものと評価され、水客、紫香、潮花といえば幼稚園時代からの友達で、二十年も一緒に川柳を続けてきて川柳雑誌の三羽烏と言われているが、こうしたことは川柳界にも稀に見ることと仰しゃっていた。その三人の句集からほぼ四十年を経て、今、正本水客句集が出る。私の修行時代

子沢山　使いにやったのを忘れ

の句に接したときの感銘は今に忘れていない。

川柳塔の句風を後世に伝える金字塔がまた一本生まれたことを、川柳塔社を挙げて心からお喜び申し上げる。

平成八年七月

橘　高　薫　風

序文

昭和四十年ごろ、川柳を始めたばかりの私は大萬川柳の欄に投句をはじめ、林瑞枝さんと二人ともベストテンに入った機会に勇気を出して上阪したのでした。いちばん前の車両なら大阪に早く着くとばかりに席を占めたものの、福知山回りの山陰線の遅いこと。

故清水白柳先生と高杉鬼遊さんのご案内で大萬の二階に着けば、そこは神々の国でした。生々庵、多久志、好郎、一三夫、葵水、潮花、小松園、摩天郎、酔々、史好、そして西尾栞、あの世に旅立たれて今も塔を見守って下さる先生方を目のあたりにして、天空に舞い上がりそう。薫風先生もお若くて。

つぎつぎと呼名される中に水客先生の静かな声がありました。朧ながら大切な記憶です。

旅と温泉がお好きな先生は今の紫香先生のように、山陰の柳人から敬慕されていられました。雅号のとおり句の芯に清冽な水の音が絶えることなく、また客の字はこの世の客であるという諦観からと、私は勝手に解釈して沁み入るように影響されてゆきました。

残菊へいささかの自負髪を梳く　　水　客

このたび黒川紫香先生はじめ都倉求芽さん、松川杜的さん、その他にもたくさんの友情結集で発刊される句集。これで散逸することなく、一冊に編まれます。

この句集を手にされて先生も奥様もどんなにお喜びになることでしょうか。そしてまた、このあとの灯ともなって長生きしてくださることを遙かより念じながらペンを擱きます。

八木千代

水客と私

黒川紫香

水客さんを水客と呼び捨てにできるほど、親しい仲で遠い親戚の関係もあって幼い時から往来している。学生時代こそ彼は東京、私は大阪を転々としていたのであまり交際はなかったが、職業人となってから彼は国鉄、私は私鉄と同じ交通関係の仕事に従事し、小学校の同窓生若柳潮花を知るに及び、共通した趣味、旅と文に青春の火を燃やした。

昭和八年、麻生路郎先生の教えを受け門下となるや、特異な性格を川柳に溶かして三人男として手前味噌ながら多少知られるようになった。潮花は踊り、水客は観劇と登山、私はスポーツ、特に野球をやることが好きで阪急職業野球団と同じユニホームを着て社員野球の選手として戦ったこともあった。

彼は前記のように山歩きをひとりで楽しみ、日本アルプスその他を踏破したと言って自慢していた。汽車が無賃という役得もあって日本全国を歩き回った。私も仕事から離れると同行二人とばかりペタペタと全国を回ったが、丹念に調べて交通公社顔負けのプランを立てそれに従いて行った。鈍足会という文芸と旅の会を作ったのもその一端で彼も潮花も足は早かったが、私ひとりが遅かった。その彼が手足と身体が不自由になり闘病を続け、テレビと句をひねる毎日になった。盟友水客さんの心根を憶うとたまらずに今回の句集発刊の動機になり、大方のご賛同を得たのが誠に嬉しく、有難いことと感謝するしだいです。いろいろと有難うございました。

お礼に代えて

正本水客

昭和三十三年に路郎先生のお勧めで紫香、潮花、水客の合同句集『三人』が発刊されたが、三人が小さい時からの仲良しで、それぞれの句風を育てているのが面白いとおもわれたのであろう。爾来三十有余年、句の散逸を惜しんで今回の句集が紫香さんの肝いりで出ることになった。句の選抜も手分けしてやってやろうという有難い企画である。川柳塔社の後援も力強い。

私は若い時から歩くのが好きで、六甲山は日曜ごとにコースを変えて行っていた。

ある夏、北アルプスの燕岳、槍岳を縦走して上高地へ抜けたのが病みつきで立山、穂高、常念、蝶、後立山、水晶等、毎年山開きを待ち兼ねて単独行動をこころみていた。富士山には一回登っただけ、富士は眺める山で登る山ではな

いとおもう。水に恵まれた山であるから、ながめる富士は目線の高さにあるが、ある時、木曾駒岳の頂上から眺めると、はるかかなたに富士の峰が浮かんで見える。富士は不思議な山である。

山登り時代を一期とすれば、二期は紫香さんと気ままに全国を歩きまわった時代であろう。北海道から本州、四国、九州まで、海外はハワイ、台湾、東南アジア等、四百五十に及ぶ個所に紫香さんが克明に句をつけて、大矢十郎さんが主宰されていた『みかん』誌に掲載されていたのがおもいだされる。

三期は私があまり気ままに歩き回ったので、天の妬みを受けたのでもないだろうが、運動神経を司る小脳の細胞が減少して歩行が困難になった。その時分から妻と二人の旅が始まった。旅の情緒は辺りの景観にあることは勿論であるが、宿の良否によることが大きい。(1)に客のもてなし(2)に浴場の気分(3)に料理とおもう。風味のある句集が心待ちになる。

皆さんのご協力で私の句集が出来る。本当に有難いことです。厚くお礼を申しあげます。

水客を語る

（昭和33・11『川柳雑誌』から）

――語る人――

麻生路郎　麻生葭乃

黒川紫香　丸尾潮花（若柳）

松川杜的

司会　氏の雅号のせいでもないのでしょうが、月初めにこの座談会をする段取りをしたら紫香氏が旅行中でダメ、それから二、三日したら潮花氏がカゼ引き、それがすんだらこんどは紫香氏のお子さんがハシカと、ことごとく水に流れたワケで、言うなれば各停で旅をするようなもどかしさでした。どうやらきょうは皆さんお揃いで、やっと軌道にのったというところです。では例によって、レディファースト、葭乃先生から発車していただきましょう。

葭乃　大阪鉄道局に勤めておられてお忙しい人ですから、句会の日以外はあまり話あうことがないのですが、キチンと座っている時の水客さんは、矢がつったっているような感じですね。

潮花　うちの女房の言うことにゃですね、鶴が立っているようだと評したことがありましたが、細い矢と鶴とは、うまく表現したものですね。（笑い）

紫香　かたちを崩さず、あのかしこまったままで、アッと言うようなシャレや冗談をトバスのですよ。

杜的　そうですね、会社でもそのとおりです。たくまざるユーモアとでも言いますか、私なんかもときどき水客さんの巧いシャレに感心させられております。

紫香　子どものころから、かたちを崩さず、冗談を真面目な顔で言ってのけたり、ちょっとした、手品をしてみせたりして、僕らをよく笑わせてくれたものです。

司会　紫香さんと水客さんはご親類だそうで。

紫香　イトコ同士ですよ。母方のね。つまり僕の母の妹が彼の母というわけです。幼稚園はずっといっしょでした。天下茶屋の小学校一年生の時、家庭の事情で彼は東京へ行って、早稲田中学から早大へと進んだのですが、お父さんが亡くなられたので中退して、また大阪へ帰ってきて関西大学の夜間部を出たのです。彼が東京にいるころ、こちらで潮花君らと「トンボ」という同人雑誌を発刊したのですが、水客君は「秋羊」というペンネームでよく寄稿をしてくれましたので、三人の友情は西と東に別れても切れることなく、今日までつながれてきたわけです。

司会　川柳はどちらが先輩なのですか。

紫香　水客君が大鉄の〝畔柳社〟で故福田山雨楼氏に指導されていたので、君もやれよとすすめられたのが、そもそもの病みつきなんです。（笑い）

潮花　僕は紫香君から、君もやれよとすすめられた。（笑い）

杜的　旅行はお好きですね。

紫香　そのころから鈍足会という趣味の旅行のメンバーでした。

潮花　僕は早足だったぜ、君やろ鈍足は？（笑い）

紫香　水客君は相撲も好きですな、今は若乃花（註・先代）に熱をあげています。芝居も好きです。ことに歌舞伎は亡母の在世中替わるたびに連れて行くという親孝行ぶりでし

たね。芝居の話が出たのでまた福井座が登場しますが、福井座の経営は私の父がやっていましたが、資金の方は水客君のお祖父さん（正石紙問屋）が出していたのです。そうですね、明治三十七、八年というから、日露戦争の頃ですね。明治天皇と日露大戦争というところかな（笑い）。

葭乃　福井座なら私も知っていますよ。

路郎　福井座は福井茂兵衛が立てこもっていた小屋だった。曽根崎新地を東西に流れていた蜆川に南北にかかっていた桜橋のすぐ西で北側だったと覚えている。蜆川が埋め立てられて今では桜橋と言っても橋はないし、地名として残っているにすぎない。私が大阪へきたのは明治三十一年だから随分昔の話だ。

紫香　私の父が経営していたころの座付きの役者に嵐璃徳や佳笑がいました。曾我廼家五郎が中村珊之助といい、十郎が時代といってウマの足をやっていたころですから古い話です。それから水客君は、新国劇の辰巳の国定忠治の声色が上手です。

司会　璃徳って帝キネにいたあの人ですか？百々之助の十七、八のころですね。

紫香　その璃徳の養女というのが、私の姉なのです。

杜的　同じ大鉄にいる関係で、私は水客さんに川柳を手引きしていただきましたが、さすがに川柳の引き出しみたいな人だといわれるだけに、あの人の早い作句ぶりにはいつも感心させられます。句会案内の葉書に、それはそれは小さい文字で、キチンとあの人独特

の字で句を書きとめて、これまたキチンと二つに折って服のポケットにしまわれておられます。

潮花　キッチリ屋といえば、水客は時間のことなんか正確やなァ。

司会　国鉄時間は世界的ですからね。（笑い）

潮花　食事はおそいな、川柳は早いけど。（笑い）

杜的　よく噛んで食べるからでしょう。甘いものが好きなんですから、歯がわるいのでしょう。それからあの人の電話は長いです。というのは、さっきも話が出ましたが、なんでもキッチリするからでしょうね。つまり本職の統計がそうさせるのでしょう。こと統計にかけては大鉄きってのベテランです。

司会　そうキッチリやられると、奥様のヘソクリがやりにくいでしょうね。

紫香　そこは愛妻家ですからうまくヤラレていますよ。（笑い）〝椿の君〟の話をしようか。

潮花　怒りよるで。

紫香　やめとこか。

司会　そんな思わせぶりな言い方をせず、是非、聞かせてほしいですな。

紫香　別にそういう大事件でもないのですが、三人が箕面にいた頃、行きつけのタバコ店にそれはそれはカレンな娘さんがいましてね。その娘さんを〝椿の君〟とよんで水客君が淡い思慕の情をよせていたのです。

司会　水客さんはタバコをよく吸ったでしょう、そのころは。

紫香　ところが水客君はタバコをよう吸わんので、吸うのは僕で買いにゆくのは水客君だったのです。（笑い）

潮花　結局タバコを買いに行ってロクに話もようせんと、たったそれきりの話でこの純情物語は終いや。（笑い）

葭乃　そんなことなら誰もが一度は味わったことでしょうに。

潮花　感傷的な句を作っても、本人は少しも感傷的になっていないようだ。

葭乃　同じ旅の駅を詠んでも、豆秋さんなら犬が出てくるとかしてユーモラスに表現されるが、水客さんは俳人に近い感覚で川柳にまとめるというところでしょう。

路郎　しかしそれが俳句にならずに、立派に叙情詩としての川柳になるんだからな。まあ異色作家の一人だと言えるだろう。

潮花　旅をするのに公用私用を問わず、日本全土ロハで行けるのは羨ましい。定年になるまでに今のうちにウンと旅をしておくことだな。

杜的　やめても十五年間は無賃パスがものをいいますから（註・現在は全廃）、水客さんの川柳行脚まだここ二十年くらいは大丈夫続きますよ。

司会　話題をちょっともどしていただいて、ご家族は子どもさんが何人ですか。

紫香　男女五人という、ちょうどいいとこです。上が二十歳ですかな。ついでに申しま

すが、水客君の奥様の妹さんというのは、やはり川柳人の辻白渓子氏の奥様なんです。

路郎　そうかな、それは初耳だ。

司会　どうやらスペースもなくなってきましたので、皆さんから水客さんの句を出していただきましょう。

潮花　川村好郎氏が水客ファンで、水客君の句は全部まとめてあるそうだ。句集でも出すときは好郎氏のもとへゆけば、たちどころに句集が編めるというわけで、まったく羨ましい話だと思います。

路郎　とにかく、水客君の句は旅の句において特にすぐれている。これは仕事の関係上、よく出張するので、自然に親しむ機会が多いからでしょう。そして非常に静かに自然に触れていることも特徴だといえよう。水客、紫香、潮花と云えば幼稚園時代からのおさな友達で、二十幾年間、いっしょに川柳をやってきて川雑の三羽烏と言われているが、こうしたことは川柳界にも稀に見る珍しい存在だといえよう。

ひっそりと蜆生きてる音をたて
竹の皮冬の音して踏まれたり
松茸が届いて何も言うて来ず
いちにち中時計が鳴ったのを知らず

月横に動くと見れば汽車曲る
お休みなさいと云うて女中の顔になり
足袋少しきつく女は旅に出る

阿蘇山にて

草千里霧は重たき色になり

司会　どうやら終着駅にきたようです。お疲れのところ、いろいろ好資料を提出していただきましてありがとうございました。

司会・筆記　不二田一三夫（川柳雑誌社編集者）

※　この文章は昭和三十三年十一月、正本水客、黒川紫香、丸尾（若柳）潮花編で川柳句集『三人』として発刊の時、麻生路郎先生のご指示により座談形式のものを序文代わりとして催していただき、発表したものの一部を採録させてもらいました。

水客の句

ゴムバンド　（『句集三人』から）

真白い障子　（『川柳雑誌』から）

葉書ひとつ　（『川柳塔』昭和40～54年）

梅　匂　う　（『川柳塔』昭和55～平成7年）

そばの花　（『大鉄川柳』昭和34～58年）

名代七味屋　（『京都塔の会』昭和47～平成8年）

てんと虫　（『我楽苦多誌』から）

旅　百　景　（『つれづれの旅』昭和52～53年）

ゴムバンド

子沢山　使いにやったのを忘れ

阪急が見えて旅から帰ってき

箸　箱

電柱の蔭から末の子がのぞき

夫婦して同んなじことで子を叱り

おいしいと言わない人と妻さとる

信用のできる屑屋と妻がいう

ゴムバンドはめたままなる妻の手よ

ふつつかな娘に二人して育て

夜話の楽しさ餅のかびをとり

たらいの裏は僕が生まれた年月日

一番で帰れば洗濯してる妻

父の死

肉親といいえぬ弥陀の眉となり

母を憶う

母のいない三畳開けてまた閉める

母の通した糸そのままに針坊主

風うごく

屋上の埃も春という軽さ
宇宙の広さへくつわ虫が鳴いて
あべの橋　汽車の煙も春になり
隠れ住んで筧の水も春になり
陳列のコップの水に冬うつる

月の出を無口な人に教えられ

裏町も水が流れて京に住む

椿落ちてもそのまま赤い色であれ

暮れきって渡しの波も見えずなり

逆光のなかを家鴨が帰ってき

ひとりの眼

石投げる楽しさ都会の子は知らず

傘さして酔うているのが分かってき

玄関までは納得をして帰り

お返事を待ってるうちに春になり

せめて医者を　へぼとののしり心済む

耳打ちの膝へ　こぼれる酒もよし

ショーウインドー貧乏くさい顔うつる

金包む手許に視線感じてい

実力でこいとは無駄なせりふなり

達者なうちに行っとかなあと出好きなり

車掌さんのモンペ　パチパチ楽しそう

新婚を訪えば二階に通される

全快の走ってみせて叱られる

男さかしく風呂敷を持ち歩き

咳払いして交番を通り越し

都会人どうかなる気の顔になり

女なる

一人切りにしといてとは女
良縁と言われて女気にいらず
電話口おんなぐるっと向きを変え
大阪弁まる出しにして女老け
女よよと泣いている間の手持ちぶさた

西瓜の種落ちて情痴の部屋となり

アルバムを次々出して打ちとける

エプロンのままの家出はたかが知れ

粉ミルク別れた妻の匂いする

耳掻きも仕舞うて本気に腹を立て

もの好きな私でしょうと会いにくる

情熱に負けそうになり炭をつぐ

爪切ってあげて付き添い別れる日

看護婦の浴衣ゆっくり叩頭する

パトロンに叱られちゃった舌を出し

高島田うつむくものに出来ており

影法師

行水の音でしばらく待たしとき
水道の横から蟹が顔を出し
出刃包丁らしくポタポタ水が垂れ
銀行の前で正月なにか売り
寄付帳へ書いたまんまに急逝し

自転車で産婆は月を見て帰り

口止めをしに二三間戻ってき

寝転んだ足許で将棋さしている

別室へはこぶコップの音させて

ふところ手万策つきたとは見えず

動くものみんな動いてホームラン

旅から

また後で来ますと女中話し好き

薬師三尊そとは明るい秋の雲

大和路

うねび山いただき近く若葉する

大和路は歴史が澱むように暮れ

山の湯の涼しさ葉書一つ書き

宿帳へしみじみ生きてきた夫婦

ロビーから見れば　きれいな浜に見え

境内の裏へまわれば海が見え

絵葉書のとおり渡月橋春になり

朝飯へ一本欲しい顔ならぶ

修学旅行きっちり畳む二三人

旅の下駄灯のある方へ歩いてみ

見送ったふんいきのまま喫茶にい

旅慣れて担ぎ屋の愚痴聞いてやり

旅らしい音で柳に傘がふれ

花時はよろしおまっせと歩かされ

紅葉まだ早く写真屋一人いる

ケーブルの灯が点々と旅暮れる

旅慣れぬ一人が起きて虫を聞き

二月堂　奈良は霞んでいてよろし

大原にて

三千院桜のなかに鐘がなり

長良川にて

総がらみ篝火ばかり眼に残り

信濃にて

梓川　焼岳　穂高　陽に競う

冬の山陰

蟹の味　旅もひとりの箸枕

秋という汽車の煙が透いてみえ

見下ろせば熱海　自動車の灯が続くよ続く

真白い障子

妹とおもて欲しいという返事

鞄持ちくしゃみしながら従いてゆく

少しずつ欠けた茶碗へみな達者

食卓へ遠慮のいらぬ人にされ

火鉢にも手が出ぬほどに気が滅入り

赤電話視線の端を雲がゆく

集金があっさり帰ったあと寒し

さりげなく女背広のネームみる

生理日で休む電話を憚らず

旅役者子の名の貯金置いて逝き

二三日さとで喋ってきた機嫌

琴のうら春の埃をはたいとく

生活の保証があって鶏を飼い

仲よしの口笛だけでもう分かり

焼け跡の星がこんなに美しい

泣き顔になって女の去に支度

ふた言めには貧乏のよさを言う

肩ぐるま父のない子が直ぐなつき

きっかけのうまい男にしてやられ

すねた子の茶碗が伏せたままにあり

真白い障子に春があふれそう

覚えてはりまっかと膳を越えてくる

いいプラン赤字まかせる人がいる

テレビ切って親身に話聞いてくれ

石に腰かけて人情ふり返り

入学の祝いにキャッチボールする

銀行の建つ板塀を叩いてみ
天井をにらんで派手な粉薬
引越した先を通天閣から探し
菓子折へ責任のない地位にいる
窓ひとつひとつに人間がいるクレオン

いちばん軽い医者の意見に頼っとき

ハンカチが濡れて宿かり生きている

余韻のない笑いが自分でも分かり

水を飲む音こころよき音のうち

菊の鉢世間知らずの妻でよし

紺絣ここの座敷の雨の音

お愛嬌によろけてみせるバスガイド

終電で帰って茶漬け食べておく

煙草もみ消して指名に逆らう気

待ちぼけの視線は春の水溜り

霧のなかからコーラスが生まれくる

団体がきて釣鐘を春にする

割箸も割ってもろうてする茶漬

肝心のこと書いて来ず女文字

カーテンで手を拭くとこを見付けられ

傘立に傘ひとつあり人がこず

一身上の都合にされてやめていき

思い出はからだを張ったことばかり

飲み仲間名刺をもろたこともなく

出し入れのはげしい貯金帳で無事

太陽がまともに沈む非常口

ここからが本心というペンしぶる

石段をのぼれば幼稚園のうた

庭掃いて逆らわぬ人になっていた

黙殺という手もあったのに気付き

三回忌おんなじ秋の花であり

気楽なのが取柄やと惚れている

オーバーを脱ぐ間もおじぎ繰返し

靴はいているのにサヨナラサヨナラ

停電のあいだも女よく笑い

畳屋のひじを見ていて小半日

これしきの孝行へもう涙ぐみ

鉢巻をとって喫茶へはいってき

母の自慢はぜいたくな父やった

タイミングの悪い男にされて無事

甘酒へ旧道のさくら散ってくる

身を捨てる覚悟ふすまを閉め終り

張り込みは隣の屋台で飲んでいる

しわくちゃの札よって月賦払ろておき

踏み台の重さ旧家の色であり

掌へあまりに軽い螢の死

ふるさとの朝は一人で爪を切り

石塔の白さのなかを白い蝶

低姿勢は総理になってからでよし

朝霧へ四股ふんでみて旅にいる

館直志徹夜の眼鏡ずっている

全盛の名残りは庭に鶴がいて

礼を言う言葉がふっと改まり

何してた人やと親類やかましい

ガム噛んでいるぼろ口はたかが知れ

鼻にしわ寄せて抽象画をみてる

病人の機嫌は飯を食うという

黙ってる母の背中へ歯がたたず

気の利かぬ父がなかなか寝よとせず

金のことかと煎茶を入れかえる

良縁と言われたことが気にさわり

葬式金をなくしてしもた夢ばかり

竹の葉を鳴らす風あり片思い

寒鮒のうごけば濁るほどの水

筆不精をみとめて貰う年になり

出土品闇の重さになれた色

静観という手があったのに気付く

爪楊枝きめ手を誰も持っていず

日当たりがよすぎて二階降りてくる

松が枯れてることから話はずみ出し

花輪かざって内幕をのぞかせる

面影はまだ花につけ雨につけ

亡き母の帯でだんだん母に似る

自分をさとす言葉になってやめる

海が盛り上がって見える小さな湾の灯

寝返りを打って喜びかくしとく

気休めの言葉聞いてる靴の紐

踏切はジンガジンガと夕焼ける

路郎先生を悼む

天の川先生の誕生日はもうこない

いい話傘の雫をきっている

指に髪巻いて心をつのらせる

成り上りに見られたくなし木を植える

西瓜の種つけて寝起きのいい背中

昼寝から起きてもすることがなし

朝顔のつるお隣は子が居らず

旅好きと知っててくれる初対面

送別という名で上座あけておく

息抜きに時計のネジを巻いてみる

野天風呂腰までの陽が透き通り

国訛りが抜けずみんなに親しまれ

片親の眼には危ないことばかり

客扱いされて母親おちつけず

傘かりてお通夜の朝を帰ってき

国宝の絵だから二三歩さがってみ

洋間から庭の苔など見てくれず

小人物やなと自分をなぐさめる

隣室の妻の話術を聞いている

合格の靴好きな道帰ってき

靴ベラに何の思想もない男

人形と話して自分を不幸にする

娘の婿もビール一本ほどでよし

犬叱る声を近所に聞かしとく

面接だけは来いとでっかいコネがあり

８ミリへも一度橋を渡らせる

親馬鹿の見るべきとこは見ていたり

手のひらの円さこぼれる水でよし

ライバルと思われているあほらしさ

男はこりごりと秋の鏡拭く

横座りスラスラ嘘が出てこない

合格が決まって歯医者へ行っている

井上八千代うごけば秋の風になり

箸まくら箸が置かれたまま更ける

妻手術のため入院（2句）

点滴注射僕も一緒に動かない

退院に大安の日を選る笑い

引越した当座は雨が耳につき

幸せそうに失業保険とりに来る

みな過去へ押しやるように波の音

飲み代を包んでもろて腰を上げ

下手くそな誘いに女のってみる

手酌でいいと嬉しい心押さえてる

むつまじい親子の膝のゆで卵

満ひとつもう愛されている自信

留守番の子が勉強してる声

闘病の花に唇あてる癖

一〇〇パーセント間違いのない肩たたく

水に散るときの桜は生きている

すぐ乾く涙で窓を開けている

我ながら下手な嘘だと靴をはく

夕顔の種と袋に母の文字

葉書ひとつ

行けるとき行っとかなあと妻誘う

やせ我慢しているうちに忘れられ

独身にも倦怠期があるという

座ぶとんをすすめてみたら去に支度

考えをまとめる顔をのぞかれる

客が帰ってからテキパキと母うごく

取り巻きがいない左遷の朝でよし

石段のひとつひとつに母達者

左遷とは言わず見送り派手にする

ささやかな抵抗にはしゃいでみる

類焼に遇いて（5句）

非常線　警官の阻止若し

天井垂れ落ち仏壇の前に靴で佇つ

焼跡の暗さは虫の鳴く広さ

火元惨　花と香華があるばかり

焼け残った物干の白さに雨が滲みる

食卓に夕刊かけて妻不在

滝壺の深さは空をうつさない

新築なる（2句）

足場はずしてモルタルの壁秋を吸う

掘りごたつ切っとく余裕とり戻し

不用意な言葉しつこく覚えてい

ええやないのと優越感すてず

葉書ひとつ頼りに遠い旅をする

静脈の浮く手に冬が去りがたく

歳月の重さを見せて屋根が反り

以下空白戸籍の僕も独りぼち

不きげんな靴だと自分でも思う

ひと言がおんなを近いものにする

葉げいとう大寺の跡と思わるる

素通りをわびて旅からハガキ来る

花活ける後ろ姿にある勝ち気

雪の底に暮してみたいと思うぜいたく

四男市大合格

友達が出たり這入ったりして楽し

貞操など考えたこともなく夫婦

山と山は出会うことなく雨走る

風があり野鳥の声の邪魔をする

墓詣りの三三五五と追いこさず

赤松のみごとな森が秋を吸う

ほろにがく妻と握手をさせられる

冬　に
あっという間に冬支度して谷の木々

寿司を巻く妻の手を見ている静か

次男結婚
僕のえらんだ人みてもらう子の自慢

街の灯に湖またたいて起きている

湯煙と流れの音と月といる

お握りの湯気しばらくは母の手に

薄氷してすいれんのうごかずに

氷の下に生きていた湖が顔を出す

長期予報も晴れ式の日が迫る

山水せき止めてうぐいの群れる蔭つくる

今日からは秒針のない暮しせん

粉雪のひととこ　ためらい見せて降る

冬の空そのままにして池氷る

冷戦中とわかり珍客笑うてくれ

うどん好き蕎麦ずき夫婦旅にいる

他人ごとだから散る故にこそ美しい

ケチ臭い話へ背伸びしてみせる

切り札にしてるとうまい慰めよう

幹事さんはどなたと女中話し好き

蜆とる舟か動くともなく動く

まいちもんじに寄せる波から春の顔

風も野性にもどる夜の動物園

じょろじょろと胡瓜がのびて雲の峰

灰皿は朝出たままの位置にあり

グループでハッパをかけに来てくれる

涙が耳にはいる　泣いているんだよ

タンタタンタン朝は港のリズム持つ

相槌が急所外れていておかし

悲しみに沈んでいても髭がのび

長生きをしすぎましたという握手

何にでも七味をかけて齢という

まだ借りおますと握手して帰る

釣ってきた鮎を夜中に届けられ

木の葉落ちつくして大きな空がある

杉丸太みがく女の手から冬

波紋の中心におらねば女気がすまず

横井さん帰る

ひとりの兵士がインタビューをとまどわせ

爪切っていて雑談にはいらない

人影が濃くなってきて旅の朝

立ちあがるときの男にある奥歯

玄関を出て本心を打ち明ける

団体のひとりが持っていた針と糸

初一念おとこを父の中にみる

握手した掌の冷たさを味方とも

鍵の音させて人生軽んじる

紋付の夫婦で遅い昼にする

残雪のおもてを転がる風の色

谷深くなり紅葉の赤がせり上がる

心にうなずけるものあり石の庭

雪の匂いを風は卍に載せてくる

蟹の宿

物好きでよし蟹食いにきた海の雪

魔法のように女笑顔を仕舞いこむ

表紙だけのような女をさらけ出し

岩風呂の奥まで螢ひかりに来

落葉焚く煙は白い笑い持つ

ためろうて心がおもい牡丹雪

虫穴を出る日の草の色が生き

おとこ不惑まだ叱られる父がいる

まっすぐな入り陽に海は身もだえる

鬼の面つけた昔を持っている

たいくつにたいくつに舞楽まだつづく

鳥の声せず高原の霧うごかずに

苔の庭　大屋根の影うごかずに

紬織る音と暮して島を出ず

握りしめたままの拳でスト終る（スト権スト）

水仙の斜面に人の影がある

ヒラヒラとさかな釣られた色になる

古きよき打水の石踏んでゆく

運のない人だと好意持っている

舵のない船に女はなりたくて

らせん階段　都会の底を見せられる

僕ひとり降ろしてバスの灯があかい

天罰が当たったんやと涙ふく

霧の中から吹雪いて山頂を教えられ

墨つくる灰の乾きが日々かわる

てんとう虫　華やかに固まり冬を越す

蟹の穴　月の光をためている

牛のよだれの地につくまでに風が吹く

玉青先生の襖絵を洲本千福寺に観る（2句）

大襖絵に立てば渦潮寄せてくる

千鳥とぶとぶ墨絵の渦が音になる

回廊は緑の風が従いてくる

鈍行の一駅ごとに雨あがる

十二時が鳴って時計もほっとする

梅匂う

判ポンと押して役所は昼にする

矢おもてに立って男の顔洗う

妻の留守　沈丁花だけがにおう

風呂敷を持ってる妻にたよりきる

商店街の裏へ出てみる旅のこと

やけくそと釘の頭は知っている

追い越した人にニッコリ笑われる

筆まめが八方美人とは限らない

振り向けば何時でも妻がいてくれる

商品券買いたいものが何もなし

最果ての一駅ごとに海荒れる

謎のある女にされて美しい

ポケットの穴に男は気付かない

手枕のむっくり起きて去に支度

定年の夫婦で落語聞きにゆく

訃の電話パンはちぎったままにある

最前列に陣取っていてよく笑う

二番煎じの軽口が出て会議済む

祝い酒夫婦ともども恩がある

なぐさめの言葉啄木から借りる

多数決なら雑草に敵わない

紅葉の奥へ奥へとバスはひたむきに

柿の皮上手にむいて未だ嫁かず

来年は蝶になる気の日記書く

白い目で見られ刃こぼれ少しする

白旗を出すとうしろへ並びに来

一列に並んで連帯感がない

聞き役にまわる風あり土筆つむ

旅人の背をたたくは風ばかり

別れたい男と風を聞いている

祭り笛ひとり来ていよいよ独り

男の子まっすぐ道を歩かない

畳の部屋にベッドを置いて夏がゆく

判断のあまい男を持て余し

女はいつも同じところには居ない

一病を得て顔立ちが深くなる

落城の歴史へ重い陽が落ちる

網棚にみかんが一つ揺れている

ふさがった両手へビラを突き出され

箸置きに箸おいたまま待たされる

かいつまんで話せと噂知っている

定食へふと煮こごりが欲しくなる

知恵つけに来たなとコーヒーいれている

消しゴムをすぐ使う子に親しめず

私の立場がないと自動ドア開く

毎日が修行と廊下拭いている

暑そうな音で太鼓が鳴っている

還俗の過去持っていて美しき

潮花君一周忌

仏前の焔おどって消えじとす

浪曲に想う

当代一の話芸と許す声の張り（京山幸枝若）

琴伴奏情念の深さ見せられる（春野百合子）

タンカ節入魂の域人を魅す（浪花家辰造）

師鶯童の半芸を越えた顔を持つ（天童三郎）

次代を荷う華やかな若さよし（松浦四郎若）

息の長い歌手で紅白には出ない

ケラケラと木の葉が笑うたら凄かろう

新聞を読んでる妻が憎らしい

お互いに心のなかで比較する

頭かずに入れておくよと無視される

灯を消して月の雫を受けている

足早に来てほおずきを鳴らしてる

ツインビル夕陽に思い秘めている

結局は鍋に落ちつく賑やかさ

善人が揃うてドラマ終らない

湯どうふへ昨日の話ばかりする

打ち返す波を無駄とは思わない

元気出せときつい握手で突き放す

我が歴史元の二人にまた戻り

うらおもてに浴衣を着てる旅のこと

爪先上りに竹やぶの径雨になる

茶がゆ炊くように寄り添う人である

三日坊主の男で少し筆が立ち

渡り鳥流木のゆれ楽しんで

あごのせて枕は雨を聞いている

入院前後（3句）

妻の寝息を確かめてから眼をつむる

成功率八割と聞いている寒さ

絶対安静四日を過ぎて眉開く

中田白李さん逝く

ふるき柳友白い李にうずもれる

新聞がはいっていない朝落ち着けず

古時計のように頼りにされている

気にするなするなとナンキン豆をむく

どたん場にきて神さまを信じない

お連れさんですかと笑顔くずさない

山菜料理の一品ずつにある心

看護婦の若さに朝があけてくる

潮花君七回忌

出席できぬ秋の暑さのもどかしさ

友達の顔して風が従いてくる

爪切っている縁側は風光る

近道を走ってきたと正直に

滝しぶき足許から降ってくる

風の便りに聞いたと嬉しい便りくる

ふとん干す指先にある空の青

なたね梅雨少うし葉書の字がにじむ

紫香句碑を訪ねて

句碑貫禄古墳の古さに負けじとす

犬がさいそくしている雨がやんでいる

如才ない人だと辻まで送られる

焼松茸ほんまにほんまに久しぶり

市場の騒音の中に静かな街の医者

おせち料理妻のいよくがおとろえず

退院の目に新緑があり犬がいる

露天の湯青葉の色を手ですくう

大勢の中に味方が一人いる

もう一人の私と話して妥協する

孫娘結婚

ウェディングドレスが似合う梅匂う

そばの花

半分に折って嬉しい葉書持つ

座蒲団で西瓜の種を掃いて寝る

お喜びに行けば夫婦で座って居

胸算用していた声で返事する

女湯も空いているらしい桶の音

お別れの電話は駅にいるという

ひっそりと白い障子に待たされる

寝正月でしたと会う人会う人に

盛り場でチョコンと亀を売っている

酒好きな夫婦で無理が言いやすい

散髪の鏡へ秋が動いて居

お風呂こたつお風呂こたつと旅終る

火を借りてから連れのある人と知り

鉛筆をけずって秋を聞いている

そばの花信濃を故郷に女持つ

手を振って別れることに女馴れ

大根の畝一直線に冬晴れる

さり気なく先客の視線うけている

旅からの機嫌が妻にまだ残り

言葉の端にそれと感じて言い出せず

仁王門のわらじを秋が吹き抜ける

タンポポの気ままな方へ顔を向け

こおろぎを妻も黙って聞いている

ハガキ一枚よこさぬ人を忘れかね

お面一本とられましたと機嫌よし

ホホホホと笑うてきっかけ摑ませず

早口になって本心のぞかせる

ポストまで近所の犬が従いてくる

いいご趣味ですと関心示さない

いちめんの芒　月は隠れるとこがない

お買得ですとお客を安くみる

うしろめたさへ少しあわてたふりをする

空と海ひと色にして雪止まず

溜り水　人が居ないと澄んでくる

歯の立たぬ相手に相槌は打たぬ

じゃが芋の芽が出て妻が子供めく

潮どきと知って小さな泥かぶる

夢を追う男で味方から離れ

酒癖のふと懐かしい人であり

仕舞風呂ひとりで力瘤つくる

くちづけで不安な言葉ふさいどく

気兼ねのいらぬとこだと顔が利くつもり

お気楽にどうぞと優越感すてず

若死をした子に夫婦で詫びている

名代　七味屋

風邪ひいたぐらいで一年満ち足りる

名代七味屋　三年坂は暮れ残り

種切れになった話題へ灯が点る

左遷の地いきなり鳶が鳴いてくれ

くるま座のひとり眼が合うことを避け

深い樹相が昨日の雨をこぼさない

熱の子と話して妻の留守をいる

損得を忘れて笑う喉ぼとけ

蟹の泡空の高さをうつさない

我もまた弥次馬のひとり眼鏡ふく

舌打ちに心の貧しさ見せている

妻の足袋すこし汚れている安堵

むかしお世話になった人だと引き合わせ

行きとどく人だと心閉じたまま

かしの式わびしき栄華みせられる

傘きせて貰うて話題かえられず

小走りの女に雪を教えられ

蓋閉じてさざえも春の潮を待つ

爪楊枝うごいて男にある不満

菜の花のなかへ遍路の鈴が消え

訪えば遠くで時計が鳴っている

食べて寝て痒いところへ手がとどき

雷鳴しきりに話とぎれない

風通しほめて新築座を移す

花の白にも濃淡があり心澄む

ひとえ帯　母には母の友がいて

木どころへ来て箸立ての箸も杉

栗めしの冷えたのが好き母想う

石灯籠の笠から雨がかわいてき

蛇足ですがと大事なことを口にする

鈴を鳴らしてさて祈る何もなし

波がしら動いて月が昇りきり

表情もなく舞妓カメラへ身構える

活花へ立つ女王（エリザベス女王）ためらわず靴をぬぐ

お忘れですかと女は自信持っている

鯛茶漬け話題のそとにいて楽し

無駄骨に終った言葉仕舞いこむ

嬉しさは涙のあとを隠さない

眉ひらく思いでお茶をいれに立ち

幸せでなさそう酒量ふえている

指折って本当に話聞いてくれ

先客の声して暫く待たされる

通夜の客帰って虫が鳴き始め

さざ波は月と遊んで飽きもせず

木の葉そろそろ散る相談をして暮れる

一口に言えばと世話好き改まり

直指庵黙って女の子が座る

海峡を黄色の蝶が一つ越え

馬鹿をした昔を男かくさない

信心の人に混じって坂のぼる

旗色が悪くおばあちゃん寝るとする

変り身の流石に早い名刺刷る

鐘の音へ桜散るまいと身構える

一筋の航跡しか船は残せない

悲しいまでに紅葉の赤が冴えてくる

外湯まで三三五五と雨にぬれ

土壇場の闇がだんだん明かくなる

大上段に構えて人生軽くみる

どっこいしょ世論も腰を上げてくる

もしももしもと理性の消える音がする

影武者のゆとりは虫を聞いている

大太鼓幕切れの雪降り止まず

無駄足をしたなと捌けた眼が笑う

岩海苔を採る厳しさを冬と呼ぶ

紅白のかまぼこが主役の顔をする

敷居越し宿の女中の話し好き

逆さ富士対岸の灯も起きている

幸せな余生これから茶を習う

生涯をかけて磁石は鉄を引く

かまきりの気まぐれ露の玉見てる

哲学書むさぼり読んで人を恋う

指ずもう良寛さんになっている

打ち水にさからう蟻を見ていたり

多情仏心　灰になるまで火をくぐる

箸割ってあげて慰めようがない

廻り道しすぎましたと余裕持つ

頬杖はきれいな嘘を聞いている

多数決のなかの一人になり果てる

千代の富士断髪式

ひと鋏ひと鋏ごとに二十年

麻原彰晃逮捕

化物がつかまりいよいよ霧深し

てんと虫

流し目をくれて老犬すねている

先生せんせいとまだ利用価値があり

声掛けて過ぎる老婆に島の顔

猫のどを鳴らして客に打ち解ける

てんと虫雨の晴れ間を知っている

控え目な母の意見に逆らえず

聞き耳をたてて老後をさみしがり

雷鳥は霧の動きを知っている

気休めに言うた言葉を覚えてい

多数決という便利さに手を挙げる

始末書のそばで西瓜を食べている

胸毛から男の汗が湧いてくる

買いかぶられたまま故郷へ帰らない

軒すれすれのバスは港の町へ入る

首の体操して幸せな日を終る

本当に待っててくれた声になる

フラスコの底で世界がくつがえる

餅は餅屋と責任のがれいうてみる

今貰うた名刺の裏へメモをする

三流に甘んじて胃の薬のむ

間違いの電話から夫婦の気がほぐれ

電話のそばにいる人が見えてくる

外堀を埋める勇気は持っている

つまずいて父の偉さが分かりかけ

窓高く山の湯の朝明けてくる

橋一つもう湯のまちを出外れる

お花見に戻れと父も折れてくる

銀色の鍵が星座に置いてある

損のない話へ眼鏡拭いている

忌の家を出てから自分の足になる

旅百景

つれづれの旅

蝦夷（北海道）

北の冬

ノサップ岬　舟に印つけて昆布漁を許される
夜来の夢載せて流氷岸による

摩周湖

突如　眼の下に摩周湖があり霧を見ず
絶壁の底に摩周湖音を消す

さわやか　北海道

バス走っても何もない素晴らしさ
トド松林の白骨が砂州を眠らせる
這松の髪まどろなる月が出る
クナシリは狭霧のなかに音もせず
海からの滝が登るかと見え崖迫る
知床連山海にそびえて大地果つ
エビ漁の三角の帆にある白い夢
丹頂鶴ふうふ縄張りを主張して舞う

放牧の牛てんてんと野の祈り
島へ行く船はテープのないままに
朝もやの湖面にクチビル山が情緒めく
海鳥が舞う知床峠は開通間近
美幌峠大雪連山の風を呼ぶ

天人峡　羽衣の滝

跳ねる水　懸かる水　滝七段に生きている
左曲右折　滝とつじょ岩壁から躍る

陸

奥（みちのく）

下北半島

本州最北端の波も入り陽に逆らえず
巨人海から生まれて人の世ならぬ岩の色

みちのく

鉱山跡しらじらとして風黙す
もみじの深さに圧倒されて渓曲がる
谷ぜんたいが湯気を噴いてる音といる
湯治客の布団を積んで酸ケ湯　春
千人風呂ヒバの湯舟は混浴で

奥入瀬渓流

木立深く左に右に滝を抱く

山ふところに伊達の太子の湯守りの湯（みちのくの湯）

銚子大滝もう十和田湖の風になる

陸中海岸

雲は異端者　視野及ぶ限り海にする

大断崖つづき海の猛りを受けとめる

上州（じょうしゅう）

上州の湯

ブナ林のなかに文字どおり湖畔の湯

那須高原川の湯

とうとうと野趣が流れてお湯になる

甲子温泉

湯は満ちて大岩壁が透きとおる

塩原温泉

おりて曲がって降りて河岸の湯にひたる

尾瀬沼

峠くだれば沼は処女地のままにあり

温泉はるか魂の吹き出たように水芭蕉

天と地のふれあうところ沼光る

池塘朱に燃えてヒウチ岳ゆれる

水ばしょう孤独　地の底まで水が澄む

草もみじ果ての果てなる陽の名残り

越後（えちご）

瓢湖

白鳥の産毛を撫でて雪小止む

五頭連山夢の稜線がくずれて瓢湖　雪

エサ食べる白鳥に野鴨　遠くいる

伊豆（いず）

大沢温泉

古さだけでない湯の宿の暖かき

蔵屋敷　山の稜線うつくしき

総桧造りの湯が溢れ湯があふれ

越前　能登（えちぜん　のと）

越前永平寺

菩提林　杉は緑を吹きあげる
六千塚の礎石苔の囁き聞いている

奥　能　登

潮騒のなかへ終バス迎えられ
山門の雨のしずくも旅のもの
断崖の楯にすがってランプの宿灯る

能　登　路

九十九湾カメラの視点さだまらず
精霊流し心を残すうごきよう
誓子の句碑あり能登のどんづまり

甲斐　信濃（かい　しなの）

甲　州

風林火山の旗ま新しく甲斐にあり
武田三代つつじが崎に燃える秋
ここにも此処にも信玄の隠し湯という慕情

信　濃

バードライン季節を過ぎた水芭蕉
カッコウが鳴き継いでいる霧晴れる
根まがりの竹採る人に声かけてゆく
岩つばめに宿の出入りを見送られ（燕温泉）

飛驒　木曽（ひだ　きそ）

飛驒高山

飛驒っこに京のみやびと江戸の粋（高山）
梁組みと土間の空間にある歴史
風物詩として朝市が生きている
陣屋の白州敷かれた小石に冬がある

乗鞍岳

槍が岳孤独　真白く人を寄せつけず
熊の子がつながれて平湯峠のマスコット

木曽路

粉雪の軽さ遠山　陽に光る

木曽五宿

雨しとど関所手形の字に見入る

関所跡　木曽福島は谷の底

生き残った宿場で旅人の顔になる

妻籠城址あお葉の眺めあるばかり

奥三河（おくみかわ）

天竜下れば櫓の音だけになる旅情

近江　但馬（おうみ　たじま）

安土近江八幡水郷巡り

水路縦横葭に視界を変えられる
水の照り舳先の波紋が生きている
安土遠望よしきりの声もせず

但馬　出石の里

雪たまる老杉のなか鐘を撞く
坂道の奥まっすぐに雪の白

丹波　湯の花温泉

大風呂へ渡り廊下も旅の音

京（きょう）

鞍馬

僧正ヶ谷　雨も寿永の色なるか

修学院離宮

借景のみごとさ四明が岳をふところに

伏見寺田屋

大提灯に明治維新がゆれている

大和（やまと）

奈良修二会

ナムカンジンサイ見事にテンポ変えてゆく
走りの行　無言にかえるリズム持つ

奈良滝坂の道

昔の人の足跡に重ねて歩く
三尊仏　大岩壁に陽がこばむ

山の辺の道

古代への道へ踏み込む曼珠沙華

浄瑠璃寺

空うつす隙を睡蓮のこさずに

柳生の里

十兵衛杉　梢から歴史降りかかる

賀名生梅林

お帰りにどうぞ物売りの人の人馴れず

散り敷く梅を座ぶとんで払うぜいたく

紀の国　伊勢志摩　淡路

那智山青岸渡寺

観世音立像半裸の眼を振り給う

杉の天から飛瀑に音なき霧になる

伊勢泰雲寺

青葉のなかからいきなり鐘の音が生まれ

三方は障子しぐれるように虫当たる

山おりきるまでを鐘撞いて送られる

淡路水仙峡

水仙峡　冬の斜面に陽がたまり

吉備　安芸　周防（さんようじ）

吉備路

きみどりの藺草は初夏をひそませる

吉備高原

蛙の大合唱へ夕焼けが消えてる

備中高梁城

櫓あと石垣のみどり深く谷ふかき

尾道

船の汽笛が汽車走る音包みこむ

細い海が銀箔のように夕日を吸い込む

秋芳洞

鐘乳石太古の脈々ふれる色

因幡　出雲　隠岐　長門（さんいんじ）

余部鉄橋

山ざくら見る人もなき崖でよし

鳥取砂丘

どこまで行っても影のない砂が降る

日御崎

灯台の白さにくもが突きささり

日本海の風うけとめて句碑ぬくし（尼緑之助氏句碑）

出雲夜桜

花のしろ夜空に深く動かない

出雲湯村温泉

桜透く陽が湯槽までこぼれて来

出雲　峯寺

箸紙に上の句あり旅なごむ
琴の音もとだえて月も上がりきり
箸置きは菜種の茎で春の膳
さくら見る心の中に吹きだまる
老桜の命のかぎり咲いて見せ

隠岐の島

摩天涯　頂き近き霧が巻く
岩肌も荒涼感が吹き上げる
島の突き帝をうつし奉る

萩

夏ミカン車窓にあふれ萩に入る
三畳半の部屋に松陰幽閉の影

仙崎

自給自足して尼僧の暮らし音もせず

津和野

鯉のいる街に歴史が溶けている
切支丹流罪の地に青野山ははのごと
マリア聖堂　乙女峠は花散るばかり

四国（しこく）

佐田岬

風の中に岬は孤絶の声あげる

足摺岬

霧はやく波の速さに語りかけ

南予鹿島

盆地かこむ山々雲のベールを脱いでゆく

九州（きゅうしゅう）

国東半島（くにさきはんとう）

人も仏も国東はみなやさしくて

山の寺星の降る音聞いて寝る

磨崖仏乱積みの石段果てるとこ

老杉山　幕切り落として磨崖仏

琉　球（おきなわ）

八重山群島

テーブルサンゴ蒼き鎧を敷きかさね
マングローブ密林ボート蛇行して上る
サンゴ礁へ石垣重き年月を耐えている
全島ネムの木が茂って牛の餌になる

「海外編」

（ハワイ）

ハワイ島

日付け変更線　雲が流れて雲が浮く
歓迎のレイいちにち蘭の香ついてくる
大火口スレスレに溶岩冷えている

（バンコク）

飲んであらって聖なる濁り悠久に
川に立つ家おとこは水を見て座る
水上マーケット川に生きてる人の皺

（台　湾）

台　北

台北は雨季ガランピは半袖で
広東四川北京と海鮮料理が押し寄せる

花　蓮

大理石の大峡谷えんえんとして息を呑む
アミ族の踊り裸足が美しい
シェーシェーとして酷寒の伊丹へ舞い降りる

仲間の句

泉佐野市　阿　萬　萬　的

親切の押し売りもあるボランティア
園児もう顔色を読む団地の子
小さい音にも盲導犬の耳動く
自画像へやっぱり何か物足りず
黒いリボンが目を引く絵画展の昼

西宮市　秋　元　て　る

受話器から「生きててくれて有難う」（震災）
二時間に一本のバス合歓の花（帰郷）
受診の日　自分に気合かけて出る
踏んばったままの空蟬秋に入る
褒めたのが孫でも悪い気がしない

高石市　浅野房子

高原も実りの秋か牛孕む

母さんが帯を締めると留守になる

芯の強さほめられたのかけなされたのか

いつからか頭に蜘蛛の巣がかかり

駅からはひとりになって旅終る

高槻市　芦田静江

四方まもる八幡神矢の竹の青

造形美台風生きる点と線

夏雲に転ばぬように石の段

杉朽ちて絵馬の若さを抱いている

淀おもう白馬は神の子で足りる

富士宮市　渥美弧秀

温かく富士が見守る老夫婦
病妻の寝息に安堵する夜明け
わらべ歌弾けば故郷の風そよぐ
終章の命を燃やす詩とピアノ
刻も水も流れる中の老いふたり

豊中市　安藤寿美子

広重の雨は斜めに東海道
ワープロが春の炬燵を占領す
虫籠を持ち兄ちゃんについて行く
そのままにしてある貴方の小抽斗
もう誰も入れてやらない傘をさす

奈良市　伊藤定子

藁屋根も見えひとときの旅の贅
大草原の小さな家の家族愛
子を三人つくった命大切に
充実しようおまけ人生藍色に
涙あふれ愛する亡夫闇に見る

米子市　石垣花子

雑草を刈ればき然と道標
指輪返し若づくりする熟女達
雑音の中で妥協の線探る
身に合った足跡残し逝った友
仏になって叙勲の沙汰がありました

出雲市　石倉　芙佐子

大空へ放すと決める白い鳩
西東女四十の風の向き
夫の絵に私の知らない橋がある
望郷の思い遥かに遠い駅
紫陽花を好きとも言えぬ雨後の蝶

東広島市　石原　伯峯

何も願わじ水の流れを見ていたり
喜寿の初春温故知新の心意気
一生を主役で通す我がドラマ
振り向けば飲み友達は影ばかり
水の流れのように拒まず追いもせず

堺市　板尾岳人

人形の死　野菜サラダを食べつくす

出口から太平洋がよく見える

兵隊になろうなろうと紙人形

雪の降る町から届く女文字

柿の木に負けたと思う帽子掛け

鳥取県　乾　喜与志

満足の顔を散髪屋に残す

八起きして米寿祝いに漕ぎつけた

父の倍生きても父を追い越せず

佳い眺めぼちぼち行こう八十の坂

飽きもせず親の代から大根汁

宝塚市　上田佳秋

止まり木で住専論はよし給え
ポストまで歩きストレス和らげる
交々の恋が埋まっている渚
けもの道　女うしろを振り向かず
五時までの男みんなに嫌われる

奈良県　上田翠光

身にまとうとげもあざみの身だしなみ
六親眷属群れ咲く曼珠沙華
霊魂だなんて未練だなと思う
願以此功徳で居眠りのけりがつき
俺の心臓時々一服してるらし

兵庫県　大江秋月

旅先で土産買うのも妻の趣味
ワープロを買ったら先に孫覚え
中央の金がまわって来ない村
朝市へ旅慣れをした女客
両方に重さを分けてイヤリング

大阪市　大坂形水

車窓暖かチルチルミチル顔並べ
一家団欒の核　芝生に新聞紙など
嫁を連れ海を渡ってゆく墓参り
家族湯へ大阪からの電話です
大阪の穴場博多で聞いてくる

寝屋川市　岡　さくら

流行ってるからと風邪までもろてくる
病得て平凡な日のありがたさ
ゆかしさの香りが残る人と会う
明暗があって人生味がある
あたたかい医師の言葉が消すいたみ

奈良市　岡本三求

飄々と五七五の句三昧
チューリップ男世帯の庭に咲く
五分五分の夫婦喧嘩を子が嗤う
蚊に刺され掻くにかけない足の裏
人生に定年のない趣味がある

西宮市　奥　田　みつ子

春愁に自分の長所挙げてみる
大文字　亡母は仕合せだったのか
無為の日々　鈴を鳴らして秋が来る
冬の雲ちゃらんぽらんに憧れる
そして一年　わたしは餅を焼いている

尼崎市　奥　山　美智子

つつましく生きた夫婦の祝い箸
一冊の本にはさんである出会い
温泉でゆとりを充電しています
きまぐれな風に心を盗まれる
化身ともいえる鏡を光らせる

神戸市　香川水聲

酒チビリ目刺し一匹あれば足る
どの辺まで脱げばいいのという少女
梅雨冷えに女の足袋が白く冴え
かつて遊んだ煉瓦通りの芽柳よ
老いらくの恋か身近にひとりいる

伊丹市　故　樫谷寿馬

草の名を知り過ぎている紀行文
文人となって武蔵の里を訪う
先方に賢い奴が一人居る
小春日の蒲団へ模様となる落葉
勲章は来ない　辞退の言葉出来たのに

西宮市　門谷　たず子

明日の絵にすこし朱を足すフルムーン
観覧車有縁無縁を遠くする
塔いくつ積めば仏に会えますか
亡父の松揺らせば修羅が落ちてくる
落葉焚くいずれわたしも地に還る

大阪市　金井　文秋

けちでよし気がよくてよし皆わが子
足るを知り人の生活覗かない
立読みの間に止んで傘忘れ
体裁をつくる弱さがまだ抜けず
危なかしい福祉の中の長寿国

西宮市　亀岡哲子

六甲がきれい解体進む街
あの星も弱虫明けにそっと出る
亀の子たわし握ると力湧いてくる
嫁となる人と会い初む桜餅
あの頃もよかったけれど今日も良い

高槻市　川島諷云児

思い出は振り返るたび遠くなる
大あくび猫に移して無為徒食
傘さしているのに心濡れてくる
落丁が多いわたしの人生譜
終章の予定は神にまかせよう

大阪市　河井庸佑

補聴器は余計な音をよく拾う
押し上げてくれた力を忘れない
遠回り無駄でなかった生きる道
背中見て育つわが子の目が刺さる
飲まないで飲ませるコツを心得る

寝屋川市　北岡波留吉

信心の深さが分かる頭陀袋
きびしい時代任せと呱々の声
お見合いの緊張ほぐす雪だるま
過疎の村僕が守ると鯉のぼり
あの世から電波がとどくお命日

羽曳野市　吉川寿美

紙コップころころ軽い思想だな
れんこんの穴から覗く平和論
友ひとりまた無に還る雪卍
秋の茄子軽く鬼の子産み落す
前向きに歩く帽子を一つ購う

平田市　久家代仕男

師の余談七十年の席に座す
先生の中にも苛めあるそうな
ふぐちりの箸は一番後にする
感傷がもろに出るから煙たがる
楢山のデイト互いに杖が要り

尼崎市　黒川紫香

はすかいに被ると若くなる帽子
弟も姉も走って行った塾
恋人の部屋で鳴らしたオルゴール
いい花へ蝶もダブルでやってくる
爪切ってくれる女と旅に出る

芦屋市　黒田能子

説法とコンサート聞く寺の門
物忘れタイムスイッチ鳴っている
大好きな母さんに叱られている
青春の素足は森を駈け抜ける
まどろみの朝エアポケットに落ちる

松原市　小　池　しげお

ゆっくりと走る電池に入れ替える
阿呆になりましょう落葉が裏返る
泣いた数笑った数を倍にする
御祝を書くときだけの硯箱
明日の絵に絵の具を全部使いきる

大阪市　小　出　智　子

夜行列車に飛び乗って風になる
今逢っておかねばさくら　さくら
まな板のくぼみに春の陽が届き
かもめーる空は西から雨になる
梅干の色鮮やかにもの忘れ

竹原市　小島蘭幸

むすんでひらいてやさしいひとになるように
大黒柱は妻だと思うことがある
明け方の雨も知らずに寝ていたか
古本屋の主人はいつも読んでいる
熱帯魚が見えるところにおく枕

高槻市　小林一完

ハンカチが人情噺知っている
終章の余白埋めたい事がある
願いごとせずに無心の初詣
妻に言うただ有難う有難う
財産はないが病気は二つ三つ

岡山県　小林　妻子

移ろいの彩朽ち果てし花衣
火よ水よ情けで渡る橋もある
花冷えの風に乗せてるみかん売り
原作の尾鰭が少し大きすぎ
生き様よ汚名ばかりの荷が出来る

大阪市　小林　トメ子

レントゲン撮したような冬桜
万歩計いい日和よと誘い出す
無料パス忘れて一区出しおしみ
脱サラの運ちゃん客に道を聞く
蹴られても自分の意志を曲げぬ奴

鳥取市　小林　由多香

飢える国余る国あり陽が沈む
赤い血が時々むほん考える
お別れのうすいレモンが苦かった
禁煙の誓いやっぱり守れない
親の背を見て学ぶには古すぎる

和歌山市　桜井　千秀

ピンチ即チャンス逃がしてなるものか
片道切符信じる外はないだろう
茶の席の和菓子に隙が見当らぬ
流せない話が水を淀ませる
封印をしたから提げてゆく刀

寝屋川市　里　小路

真直ぐにしか走れない子に疲れ
定年に悔い一つないかたつむり
横道へそれた勿体ない資格
酔い醒めの水の旨さも知らず老い
五十年添うてて何とでも申せ

寝屋川市　柴田　英壬子

満腹感まるで知らない百合の花
如来さまのかんざしによい藤の花
ステッキが似合う紬のよき世代
子沢山頓智すぐれたのも混じり
石女の宝は白く揃った歯

鳥取県　新家完司

わたくしのこころよ金を欲しがるな
金は腐るほどある　と言うのが口ぐせ
削岩機むかしの俺のような音
俺はゴジラだティッシュの箱を踏み潰す
愛を下さい　なければ酒をもう一本

青森県　諏訪柳々

人や人蜘蛛の糸より切れやすく
こぎん刺す吾が人生の歩むごと
野心ない男も味気ないものだ
罪ひとつ無知の涙は澄んでいる
裏金が動いて世間まるくなり

尼崎市　住谷石舟

四万十の蛍　龍馬は忘れない
また風と話したくなり旅に出る
やさしさに飢えて花屋の前に佇つ
愛ひとつ形状記憶して綴る
さくらからプラス思考になる背骨

静岡県　薗田獏沓

地味ながら春に欠かせぬみそさざえ
政治家は露天などには座らない
住専を日向ぼっこが怒ってる
賞状書きまだワープロに任されぬ
投げやりに受話器を置いて恋終る

出雲市　園山　多賀子

蛇口から女の生業掌に受ける
すいとんの味に喝采したことも
給料袋逆さに振ったことがない
喝采のない葱坊主競わない
来た道に残しておこう花の種

豊中市　田中　正坊

来年も生きるつもりの花の種
一番はすぐに決まったコンテスト
吉兆の名は知っている握り飯
わが人生添削できるものならば
シベリアの名簿に並ぶタナカさん

京都市　高沢　栄

逢いたいと少し背伸びの土筆ん坊
やがて咲く月下美人を待つしじま
睡蓮の息吹き聞こえるモネがいる（陶板画見学）
五　六粒むいて一人の栗御飯
古半紙に臍の緒大事　タンスの奥

岸和田市　高須賀　金　太

何方にもおでこの広さなら負けぬ
僕よりも太った妻を許せない
けなしても褒めても女化けてくる
てのひらに君の返事が残ってる
手ぶらで行くにも電車賃が高い

八尾市　高杉鬼遊

いつまでも何にこだわる土生姜
人生はいろいろ七味唐がらし
神さまをさがす冷蔵庫を開ける
まっすぐな針で魚を釣っている
十二月八日を何度生きられる

八尾市　高杉千歩

二人三脚よそ見している暇がない
ひとり言多くなるのも歳ですか
なりゆきに任せとことん従いていこ
すかたんばかりして呆けと思わせる
続編もあなた次第で書き直す

松原市　玉置重人

鬼門からにっこりのぞく美人ママ
寄ってたかって俺のボトルを飲んでいる
まだ髭を剃る朝があり男たり
借方をふやしバランスとってます
婦唱夫随おんなじ薬飲む食後

和歌山市　垂井千寿子

同窓会歳相応の皺で良し
衣替え明日へ心も軽くなり
そむかれても母の切れない赤い糸
裏切りの味方が一番恐い敵
人生の余白の足音高くする

大阪市　津守柳伸

人情のかけら探しをする未来
一生の起伏しみじみ佐渡おけさ
活簀から海老がウインクして困る
なるほどの味ふなずしの好き嫌い
付き合いの良さ折り折りに愛でる花

今治市　月原宵明

喝采へ孔雀は羽根がたためない
疲れても母寝姿は曝さない
後悔へ追い討ちかける夜の雨
直球しか知らず出世に遠く居る
一喝がもう出ぬ父を淋しがる

高槻市　辻　白渓子

秘境縫うＳＬ降りたいとこがある
洞窟をくぐって船が行く国賀
好い知恵が浮かばず一人蜜柑むく
温室の花へ止まってみたい蝶
定年のそれから靴は磨かない

大阪市　辻　川　慶　子

宵まつりお揃いを着て手話弾む
掛時計怠けごころが少しあり
遊ぶ事好きな仲間で歩が揃う
落葉踏む季の移ろいをしみじみと
別れの日雨は斜めに降ってくる

松江市　恒松町紅

毛虫にも言い分がある蘭の鉢
ユーモアの好きな命が弾み出す
コンクリートの壁が邪魔する男運
コピーしたようだと性が合っている
冗談を真顔で老いの悪い癖

大阪市　寺井東雲

何で今生きているかが不思議です
何事も完成までに穴を堀り
書く事がなにもないので平和です
姓は知らんがアダナで何時も呼んでいる
他人よりも自分の体謎だらけ

奈良市　天　正　千　梢

欲捨てて暮らして行かんのり茶漬
錆びることの美しさを感じかけ
孝行の軍手毎日洗う幸
甘い考えで広い道を歩きすぎ
一期一会キザな言葉つかいすぎ

京都市　都　倉　求　芽

神の意のとおりに赤い実は赤に
晩秋へ雲の重さが少しずつ
ユーモアのわかる鬼などもういない
一つや二つはゲリラもいそうな千羽鶴
段違い平行棒の夫婦愛

鳥取県　土橋　螢

ちからいっぱいうれし涙を流しあう
果報百態　頬杖にくる睡魔
生涯に二度ない旅のパスポート
あしたからひとりで飛べる燕の子
紺碧の海から響く　海ゆかば

兵庫県　遠山可住

定年のめしはゆっくり噛むとする
のらくろが心の隅でラッパ吹く
母ひとり流れて来ない桃を待つ
ふるさとを出てから月は笑わない
ばあちゃんの知恵がこそっと添えてある

寝屋川市　冨山　ルイ子

桜咲く知らせに母の車椅子
散り急ぐ桜は母の肩に散る
安否問う卒寿の母の電話口
母を風呂に入れる宝を抱くように
母達者生きているだけでありがたい

豊中市　中尾　飛鳥

二人三脚どちらも当てにして夫婦
スナックのボトルに聞けばみな孤独
賞味期間過ぎた命を無駄にせず
歯科通いして戦力を整える
なんべんもNGが効く夫婦仲

相生市　中塚礎石

躓きを知らずに生きてきた卒寿
極楽の道を知ってる男坂
罪一つひとつ写経の文字が消す
居酒屋の話を聞かぬから強い
染み込んだ汽車の匂いへ寄ってくる

鳥取県　中原汲香

壁になるものは何んにも無い仮説
どの花もやっぱり人の世話をする
午後のため朝から敷いた花筵
しずかな息おごらない息とても好き
苦労して孝行おもうことはない

鳥取県　中原　諷人

さからえぬ骨の軋みも明かい呼吸（いき）
天に地に雄の児らしさを弾くなり
ちっぽけな身の脊髄をカリエスに
転け起きて熱い血しぶき健やかな
蔑みの暗きを抜けて生くさだめ

鳥取県　中原　みさ子

案じれば母も案じているきずな
めぐりあい惹かれるいのち熱くなり
蓋の弾けたオルゴール狂いだす
いつもの時間いつもの場所をにぎやかに
抱いてください猫騒ぐ排卵日

鳥取市　中森　葉士人

雑草と言う名で種は絶やさない
福の神裏木戸くぐって来てくれる
人形よ人間臭くならぬよう
空を飛ぶトンボに泥の染みがある
竹の子がのびて思案も恋もする

熊本市　永田　俊子

余暇知らぬ父の軍手のひとり言
ロボットのひとつおぼえが侮れぬ
愛に迷うシャンパングラスの細い脚
糸切歯なくしてからの妥協ぐせ
足裏の痛さを知った母の道

尼崎市　長浜澄子

脈絡のない筋書きと生きている
春は饒舌おんなの耳を桃いろに
女郎花ふっと乱れてみたくなる
ふいに郷愁一途に走れ竹の馬
逢いたくてしきり苺の朱を潰す

松江市　柳楽鶴丸

魚が泣いたら生きづくりは出来ぬ
女の黒髪死語になりそうだ
男女差別を是認している女がいる
愛情で結ばれ不一致で別れ
女がつくった粗大ゴミ濡れ落葉

岡山県　二宗吟平

趣味の輪に抱かれ川柳一筋に
句をひねり頭をひねり老い忘れ
さっぱりと日の出浴びつつ三千歩
内にかとなじみの友は上がり込み
寿を重ね目出度目出度の今日傘寿

西宮市　西口いわゑ

いのちなり生まれる時も泣きながら
花びらいくつ女の年は数えまい
耐えて来たことには触れず茶を入れる
一冊の本とトンネルから抜ける
グラスの中のたわむれなのだこの浮世

大阪市　西田　柳宏子

迷たとは言わず寄り道したと言う
素直にとれば何でもないことだったのに
痛かった父の拳が泣いている
置石を鴉に教えたのは誰だ
忙しいああせわしいと老母達者

大阪市　西出　楓楽

平熱が少し低目で淋しがり
凡人のジョーク手垢にまみれがち
良妻と賢母ではなし弾まない
酸欠の街で四角になる思想
晩学の辞書に暗示をかけておく

和歌山市　野　村　太茂津

走れ跳べ翔べ焦るな独り叱咤する
咲けば散る花の定めに身を鎮め
叩いたら風鈴が鳴る友を得て
幸せは医者智者福者の友に遇う
人生の落葉にも似て舞い騒ぐ

奈良県　長谷川　春　蘭

親友も心の妻も居た湯里
五子八孫曽孫二人も恙なし
薫風へ手をさしのべて幼児の歩
仕合わせをつかむに小さい灯をともし
それぞれの生きざまありて薄暑来る

米子市　林　荒介

川幅を確かめている竹とんぼ
天井の高い家風で列になる
歓喜仏むかしの人は大らかだ
舟を漕ぐわたし自身を漕ぐために
足跡を消したら明日に繋がらぬ

西宮市　林　はつ絵

駆け込み寺の時計をぐんと遅らせる
追い越していく靴音のよく響く
息子らよ可もなく不可なくそれでよい
正直な鏡へついに負けました
厳粛に目の奥に置く砂時計

出雲市　原　章峰

鶯より静かになって聞いている
サンゴ排卵　兵のいのちかも知れぬ
左脳から右脳へ潮が満ちていく
わたくしの影が水先案内人
もう嫁に行く気になっている谺

尼崎市　春城年代

驚きもせず野良猫は眼を閉じる
菜の花が笑ってからの風景画
昆布飴くれた老婆と道連れに
おだやかに生きようとする老いはげし
部屋の四隅きっちり侵す梅雨さなか

尼崎市　春城　武庫坊

黄塵萬丈　騎馬民族の幻か
遺伝子が神に逆らう花咲かす
鈍行ではっきり聞いた春の音
童謡が好きで桜の下にいる
雨予報　仏の花を買いに行く

横浜市　菱田　満秋

男の眼すでに衣服を剝いでおり
子に遺す捨てられそうな物ばかり
生きていてよかった八月十五日
起きている時間を人生だと思い
背伸びをすれば見えそうな二千年

和歌山市　福井桂香

フルムーン妻も鼾をかいている
帽子だけくるくる変えている政治
ハンカチにアイロン掛けている平和
収縮をくり返しては海に出る
海峡を渡るレモンを懐に

和歌山市　福本英子

花の酒みんな仲間にしてくれる
臥龍桜つっかい棒が支え合い
楷書の木ばかり育って庭が病む
背かれてそむいて絆深くなる
復興の街に若さが先ず戻り

堺市　藤井　一二三

開店記念キミもアナタもみなサクラ
ひねくれた鳩で帽子を出たがらず
隣からの土産と同じ値を探し
廃校のうわさをよそに子ら跳ねる
決断のまだ生け垣の続くなり

島根県　藤井　明朗

生かされて一日運へ合掌す
また甘い誘いに乗って損をする
日本に四季あり五穀豊かにす
春は舞い散り万物の衣替え
いい友に出会いしあわせな米寿

吹田市　藤村〆女

叱ってる母も泣いてる影法師
良妻の仮面外して楽になる
回り道月が私を歩かせる
欲捨てた心に四季の星が降る
食べ物の恩を忘れている平和

松江市　舟木与根一

様々なドラマと橋は黄昏れる
バツイチで男勝りで泣き上戸
仏壇へ告げ口をして気を晴らす
自家用の畑も入れる余命表
花の種蒔いてやさしい雨となる

尼崎市　古川正子

故郷は見知らぬ人に声もらう
わが道は山川過ぎて春の野ゆく
赤が寂しいデンドロビウムとの対話
さびしくて亡夫と並べる白い茶碗
しろい月たそがれに浮き私もひとり

和歌山市　細川稚代

花追うて情けを追うて訪う庵
泣きながら散った桜もあるだろう
そむかれた日のぶらんこは重かった
親ゆずり馬鹿正直と言う宝
新任の教師にあだ名つく五月

和歌山市　堀　端　三　男

母の日も母の舞台は台所
父の日は父を男にしておこう
目に見えぬ支えを受けて生かされる
返事するように仏の灯がゆれる
定位置に母居るだけで輪が和む

大阪市　本　間　満津子

雨降れば有難く晴の日は嬉し
激流に添うて花咲く径も有り
ほどほどの欲で明日に夢が有り
激論の出来る仲間が突破口
空青く花紅くあれ太郎の絵

西宮市　牧　渕　富喜子

もう一品に何時も豆腐を買っている
ぶらり出て甘栗買って帰る父
真剣に生きた背広が吊ってある
しみじみと運が八分というお酒
要領を覚えて鬼は弱くなる

大阪市　町　田　達　子

世間音痴そんな言葉がおかしくて
紫陽花の私語ふんふんと聞いている
吊橋の真ん中へんで聞く本音
まんざらでない主夫たちのお料理熱
母の日と落差　静かな父の日よ

京都市　松川杜的

起死回生リンゴの色が美しい
台所の要所要所にあるゴム輪
淡々と生きて合掌忘れない
一人でも笑える稽古しています
この夫に草書のかすれがちと欲しい

京都市　松川芳子

口だけは達者ですわと先手打ち
まだ望みあるから走りつづけよう
節目節目で結び直している絆
衣食住足りて心にあるひずみ
あっさりとくれた薬が恐ろしい

川西市　松　本　ただし

ゲートルともんぺ並べた資料館
追憶の奥に残っている軍歌
ピカドンに負けたと今も思いこむ
口先の平和に慣れたまま平和
靖国の神を増やさぬ鳩が舞う

宝塚市　丸　山　よし津

ほどほどのそのほどほどが難しい
玄関の靴は未来へ向けて脱ぐ
花火師の苦労は闇の空に咲く
次の世もやはり女で渡りたい
涅槃西風命の果てのあっけ無さ

八尾市　宮崎　シマ子

決算のつかぬ命をいとおしむ
写経百枚罪の一つも消えたろか
八分なら夢が叶うたことにする
美しい月に神話がつきまとい
青田渡る風は豊作告げて行く

八尾市　宮崎　弘直

残り火がはぜて阿修羅な薪能
新月が架かり霜夜の靴の音
遠足の歓声が舞う里の駅
走り抜けた風一陣の修羅を呼ぶ
思案顔我が家の猫も恋らしい

相生市　村木信子

眼帯をとればみどりの風に会う
激動を生きた命が火をはらむ
句読点どこで打とうか老いの文
ライバルの死角で辞書を繰る焦り
あとの祭ばかりで曇る眼鏡拭く

相生市　森　綾子

紅白のリボンで贈る蝶結び
一肌も二肌も脱ぐ父の愛
白寿までのんびり生きて鶴を折り
白旗をかざした姑の車間距離
土いじり抱かれた花は疑わず

東大阪市　森　下　愛　論

手の平で折り畳まれて恙なし
千代紙に包む愛をば胸に秘め
胃に刺さるストレスたぐり捨て所
余命表かえてアクセル踏み直す
生き残る一際高いネギ坊主

鳥取市　森　田　熊　生

目が覚めてみると隣は他人なり
半分は聞き流しとくメガネ拭く
ステテコでうろうろと娘に叱られる
そう言えば風船が空飛んでいた
正直に話したくなる目に出合う

鳥取市　森田華子

テレビの音だんだんでかくなる老化
雨音に昨日のしこり解けて来る
一握りの幸せ胸で温める
信じ合う友が叱ってくれる酒
鼓打つ脂が知ってる浮き沈み

米子市　八木千代

大屋根は女主人を信じない
ひきながらひきながら潮満たんとす
水甕があふれて朝を疑わぬ
今　嘘を書けば　きのうも嘘になる
結界のところどころに椿の木

三原市　八島白龍

色即是空さくらは散るを美学とす
反核へ人種は問わぬ手を握る
この町でしぶとく生きる住心地
日々好日今日の終りの照り返し
弥陀の掌に乗れるか読経くりかえし

岡山県　矢内寿恵子

寺の鐘振り向くことも教えられ
流れ雲忘れ上手になってきた
茄子はむらさき一途なものをだいている
安らぎは米何有の里におく祈り
昭和史のどの頁にも風ばかり

神戸市　山口美穂

ふるさとの言葉はやさしい風となる
少し哀しい　だから笑顔をみせている
反対の意見が咽にひっかかり
片ちびの靴がわたしに合うている
もつれ糸　わたしをあざ笑うように

八尾市　山下美津留

苦い水たっぷり飲めと旅に出す
白い歯を見せて空缶蹴る若さ
沸騰点近い男をチェックする
ゆったりと過去を童話にして聞かす
もてている男の側で欠伸する

吹田市　山本　希久子

美人には遠い遺伝子だと思う
あげるものなくてやさしくしてあげる
人生薄暮もう待つこともなし恋のバス
盛りすぎてならぬサラダも愛情も
哀しみを沈めて川面澄んでいる

西宮市　山本　義子

柔らかいもの食べているのに歯医者いき
雨女と言われても責めとれません
花一輪これも味なる京料理
美術館で一日すごす外は雨
醍醐味は汗かき登る山にあり

藤井寺市　吉岡美房

打ち過ぎた杭が一番邪魔になり
まだ男何のじたばたするものか
決断へ男の海が満ちて来る
あせらずに流れて川は太くなる
残心は月の光を浴びて立つ

宝塚市　吉田笑女

ひさびさに話す姉との長電話
八十を迎え残った三姉妹
はなれ住む姉の痴呆が気にかかり
いつかまた笑顔で逢いたい三姉妹
地に足をつけて歩こう老いの道

故 若柳潮花

家元へ脇役たのむ初舞台

頂いた人気大事に舞台踏む

太棹の糸へ津軽の波が鳴る

女みな絵になる姿もっている

好きだから少うし距離を置いてみる

句集参加者（50音順・敬称略）

阿萬　萬的　秋元　てる　浅野　房子　芦田　静江　渥美　弧秀　安藤寿美子
伊藤　定子　石垣　花子　石倉芙佐子　石原　伯峯　板尾　岳人　乾　喜与志
上田　佳秋　上田　翠光　大江　秋月　大坂　形水　岡　さくら　岡本　三求
奥田みつ子　奥山美智子　香川　水聲　故樫谷　寿馬　門谷たず子　金井　文秋
亀岡　哲子　川島諷云児　河井　庸佑　北岡波留吉　吉川　寿美　久家代仕男
黒川　紫香　黒田　能子　小池しげお　小出　智子　小島　蘭幸　小林　一完
小林　妻子　小林トメ子　小林由多香　桜井　千秀　里　小路　柴田英王子
新家　完司　諏訪　柳々　住谷　石舟　薗田　獏沓　園山多賀子　田中　正坊
高沢　栄　高須賀金太　高杉　鬼遊　高杉　千歩　玉置　重人　垂井千寿子
津守　柳伸　月原　宵明　辻　白渓子　辻川　慶子　恒松　叮紅　寺井　東雲
天正　千梢　都倉　求芽　土橋　螢　遠山　可住　冨山ルイ子　中尾　飛鳥
中塚　礎石　中原　汲香　中原　諷人　中原みさ子　中森葉士人　永田　俊子
長浜　澄子　柳楽　鶴丸　二宗　吟平　西口いわゑ　西田柳宏子　西出　楓楽

野村太茂津　長谷川春蘭　林　荒介　林　はつ絵　原　章峰　春城　年代
春城武庫坊　菱田　満秋　福井　桂香　福本　英子　藤井一二三　藤井　明朗
藤村　〆女　舟木与根一　古川　正子　細川　稚代　堀端　三男　本間満津子
牧渕富喜子　町田　達子　松川　杜的　松川　芳子　松本ただし　丸山よし津
宮崎シマ子　宮崎　弘直　村木　信子　森　綾子　森下　愛論　森田　熊生
森田　華子　八木　千代　八島　白龍　矢内寿恵子　山口　美穂　山下美津留
山本希久子　山本　義子　吉岡　美房　吉田　笑女　故若柳　潮花

協賛者（50音順・敬称略）

牛尾　緑良　橘高　薫風　久保　正剣　小糸　昭子　佐倉　宗悟　坂口　公子
冨士原白峰　間嶋青丹子　松下たつみ　松森　柳門　宮園射月芳　宮口　笛生
山根めぐみ　山本　礫　吉本　菁風　両川　洋々

あとがき

都倉求芽

このたび黒川紫香先生の発案で、卒寿を迎えられた正本水客先生の句集を、とのお話があり、まったく経験のない小生がお手伝いすることになりました。もちろん、大鉄川柳で手ほどきを受け、以来、京都塔の会も絶大なご指導を頂き、現在まで何かにつけてお世話になっている両先生のことですから喜んでお手伝いさせて頂いたのですが、なにしろはじめての慣れない作業ですから、各方面に多大のご迷惑をおかけしたことと存じます。ここにあらためて深くお詫び申し上げます。

それにしても計画発表と同時に、地元はもとより遠隔の地からも続々と協賛の方々から投句が届きましてその情熱に圧倒されながら感激のうちに発刊の運びとなりましたこと、小生の生涯の想い出になるものと心からお礼を申し上げます。

松川杜的

このたび紫香先生のご発案で水客先生の第二句集『正本水客とその仲間』が発刊される運びとなりました。常々の念願がやっと叶った思いで真

におめでたいことと存じます。
水客先生との出合いは旧国鉄の時代、職場川柳の集いからであり、その後もずっとご親交いただき、五十年という長い年月になります。
この間、川柳の指導はもとより、わが「京都塔の会」の設立には大変なお力添えを頂き有難うございました。
冒頭の「水客を語る」で歓談した思い出が蘇り、懐かしさいっぱいの感じです。
薫風主幹には早速ご賛同、そして八木千代様とともに序文をいただき、有難うございました。
また、この企画にご協賛くださいました皆様には心からお礼を申し上げます。有難うございました。

黒川紫香

おかげ様でやっと出来ました。企画、編集、発行まで刊行委員はもちろん、薫、みつ子、正坊、しげおの皆様にはお忙しい中を助けてもらい、感謝しております。有難うございました。

なお、川柳塔同人、本句集協賛者（仲間）のお一人、樫谷寿馬様には去る八月十八日、急逝されました。謹んで哀悼の意を表します。

正本水客略歴

本　名　正本佳雄

明治40年８月　大阪市で生れる

学　歴　早稲田大学　中退

職　歴　国鉄大阪鉄道管理局

柳　歴

昭和８年　黒川紫香、丸尾(若柳)潮花とともに麻生路郎門に入り、川柳雑誌社不朽洞会員となる
同時に福田山雨楼、岡田某人、浜田久米雄、植山九天、阿萬萬的らとともに大鉄川柳を創設

昭和40年　路郎師死去に伴い、川柳塔（川柳雑誌改題）社同人・副理事長を経て現在、相談役

平成８年10月１日発行

川柳句集　正本水客とその仲間

頒価　1,000円

編集　都倉求芽　松川杜的　黒川紫香

発行　正本水客とその仲間刊行委員会

代表　黒川紫香

〒661 尼崎市武庫町１－47－15

後援　川　柳　塔　社

〒545 大阪市阿倍野区三明町
2-10-16　ウエムラ第２ビル

美研アート印刷